

逐次通訳クラスにおけるスマートフォンの活用と効果

西畑香里

(東京外国語大学)

Abstract

This paper reports the utilization of smartphones and its effect in a consecutive interpreting class held in the Fall semester of 2016 at Tokyo University of Foreign Studies. Following a request in the previous term-end questionnaire from a student hoping to find good self-learning materials and given that every student owns a smartphone, I introduced smartphones into classroom activities as well their use as a self-learning tool. I review the benefit of utilizing smartphones in general classes through a comparison with Computer Assisted Language Learning classes and also examine – principally by means of a term-end questionnaire – how students perceive the use of smartphone in class and as a self-learning tool. I propose this utilization of smartphones as a possible interpreting pedagogy while referring to some challenges to consider for the future.

1. はじめに

本稿は、2016 年秋学期に東京外国語大学の学部生向けに開講した逐次通訳演習クラスで、スマートフォンを活用しその効果を調査したものである。背景としては、前学期に開講した逐次通訳演習クラスの受講生対象に実施した学期末アンケートで、自宅学習できる教材の希望の声があったことと、受講生のスマートフォン保有率がほぼ 100 パーセントの状況であることから、スマートフォンを授業内のアクティビティ及び自習用のツールとして活用できないか検討したことがきっかけとなっている。

通訳クラスや語学学習クラスでは、多くの大学でも導入されている CALL (Computer Assisted Language Learning コンピューター支援言語学習) 教室を使用することが多いと考えられ、どのようなレイアウトを採用しているかは大学により異なるものの、一人一台コンピューターが設置された CALL 教室の使用にあたってはメリット・デメリットがある。今回対象となる逐次通訳演習クラスは、CALL 教室ではなく、前方にホワイトボードとモニター、可動式の机と椅子がある通常教室にて授業を行った。

本稿の目的は、通常教室でスマートフォンを活用する事で、ペアワークやグループワークの実施が容易な通常教室のメリットを維持しつつ、CALL 教室と同等の環境を部分的に実現でき、いつでもどこでも使える自習用のツールとしても活用できることの効果と、受講生のスマートフォン活用に対する受け止め方を調査することである。さらに、今後の課題にも触れつつ通訳クラス教授法の一提案としたい。

CALL 教室

通常教室



2. 対象クラス概要

2.1 受講者

対象クラスは、2016 年秋学期開講の学部 2 年生以上が受講する英語選択科目としての逐次通訳演習クラスである。学部 2 年生が大半を占め、受講者数は 24 人、その内 9 人が春学期からの継続受講、15 人が秋学期からの新規受講であり、春学期に受講していた 9 人以外は、通訳を勉強するのは初めて、もしくは通訳に関する事前知識がほとんどない状況であった。受講生を対象に、受講動機、通訳に関する事前知識について行ったアンケート調査の結果を紹介する。

まず受講動機については下記のような回答であった。(複数回答有)

通訳に興味・関心がある	11 人
英語力を向上させたい・実用的な英語を学びたい	7 人
春学期の受講で英語力が向上したため	3 人
時間割の都合	3 人
友人のすすめ	2 人
単位のため	1 人

受講前、通訳についてどれくらい知っていたかに関しては下記のような回答であった。

春学期に学んだ知識	9 人
-----------	-----

ほぼ何も知らない	9 人
本で読んだ知識	2 人
全く知らない	2 人

「ほぼ何も知らない」の回答の中には、「同時通訳と逐次通訳があることくらいは知っていた」や、「同時通訳と逐次通訳の違いすら知らなかった」、「種類がいくつかあるのは知っているがトレーニング方法は全く知らない」等のコメントが含まれていた。春学期からの継続受講生以外は、通訳トレーニングそのものも初めてのことが多いことが分かる。

将来何になりたいかに関しては下記のような回答であった。

語学を使う仕事	13 人
未定	5 人
翻訳者	1 人
通訳者	1 人
ジャーナリスト	1 人
公務員	1 人

何かしら語学を使った仕事につきたいと回答した受講生が多いものの、具体的に通訳者と回答したのは1人のみの結果であった。田中他 (2007) が行った「通訳クラス受講生たちの意識調査」の中でも、通訳クラスの受講動機が、通訳者を志願することから語学力強化を期待することや単位取得のため等、ばらつきがあることが浮き彫りになっているが、今回の対象クラスにおいても、将来通訳者になりたいと回答している受講生は1人とどまり、受講動機についても、通訳に興味・関心があることや、英語力を向上させたいことが多数であるものの、時間割の都合、以前履修した友人からのすすめ、単位取得のためのように、自発的な動機ではない理由もみられた。

受講にあたってはクラス分けテスト等を行っていないため、TOEIC スコアで見ると、500 点台から 900 点台までのばらつきがあり、クラス平均が約 750 点であった。

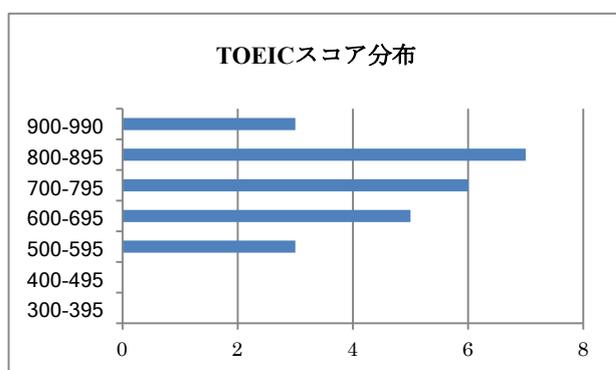


図 1 対象クラスの TOEIC スコア分布

2.2 授業計画、使用教材

a) 授業計画

対象クラスの概要は、通訳の基本である逐次通訳の基礎を、ペアワーク、グループワークを通して学ぶことであり、通訳の基礎トレーニング、逐次通訳演習を通して英語及び日本語の総合的なコミュニケーション能力を向上させること、また最低一文を最後まで聞いて訳出できるようになることを目標としている。全 13 回の授業に加えてアクティブラーニングの課題で構成されている。

表 1 授業計画

	日程	授業内容
第 1 回	10/6	オリエンテーション
第 2 回	10/13	通訳基礎トレーニング
第 3 回	10/20	通訳基礎トレーニング
第 4 回	10/27	通訳基礎トレーニング
第 5 回	11/10	山中伸弥教授スピーチ
第 6 回	11/17	アクティブラーニング発表
第 7 回	12/1	山中伸弥教授スピーチ
第 8 回	12/8	期末課題 逐次通訳演習準備
第 9 回	12/15	期末課題 逐次通訳演習(1)
第 10 回	12/22	期末課題 逐次通訳演習(2)
第 11 回	1/5	期末課題 逐次通訳演習(3)
第 12 回	1/12	期末課題 逐次通訳演習(4)
第 13 回	1/19	まとめ

b) 使用教材

通訳の基礎トレーニングであるサマライジング、シャドーイング、クイックレスポンス、サイトトランスレーション、リプロダクション、ノートテキング、逐次通訳基礎練習には基本的に同じ教材を繰り返し使用し、適宜補助教材を追加で使用した。主な英日教材としてTEDトークのプレゼンテーションより、マット・カツの 30 日間チャレンジ (原題: Try Something New for 30 days¹) を選定し、主な日英教材としては山中伸弥教授のスピーチを選定した。

TED (Technology Entertainment Design) とは、様々な分野からアイデアを紹介して広めることを目的とした非営利組織であり、毎年アメリカでカンファレンスが行われるのと並行して、無料でのプレゼンテーション動画のインターネット配信が 2006 年より行われている。日本でも TED トークを素材にしたパブリックスピーキングや英語学習教材が多く出版され、NHK の番組「スーパープレゼンテーション」でも TED トークが放送されている。英語クラスでも教材として使われることが多いと考えられるが、その特徴及び英語学習に活用できるメリットとして、音声・動画のダウンロードが自由にできる点、スクリプトが入手できる点、トピックが多岐にわたり豊富に

選択肢がある点があげられる。TED トークの豊富なリソースから教材となるプレゼンテーションを選定するにあたっては、主に長さ、スピード、内容、の3つの基準を満たすものとした。

一つ目の長さに関しては、サマライジングの練習や、シャドーイング等の基礎練習を繰り返す行うためには長いものより短めの方が適しているため、TED in 3 minutes というカテゴリーの3分程度のもをを対象とした。

二つ目のスピードに関しては、スピードがあまりにも速すぎるとシャドーイングの練習等には適さず、自信喪失につながってしまうことを避けるため、適度なポーズが入っていることも併せて、速すぎないものを選ぶようにした。スピードと合わせて発音が明瞭かどうかポイントとなる。

三つ目の内容に関しては、受講生の興味・関心に合いそうなものであること、他の教材とのバランスはどうか、また逐次通訳演習のアクティビティに発展させやすいものかどうか、を選定基準とした。

c) アクティブラーニング

アクティブラーニングの課題としては、通訳基礎トレーニング教材に使ったTEDトークのプレゼンテーションで、マット・カツが提唱する新しいことを30日間やってみるチャレンジを受講生が自由に選んだトピックで実践し、その内容・感想を3分間の日本語スピーチ用にワードでまとめて講師宛にメールで提出する課題を出し、第6回目の授業で行った逐次通訳演習のグループワークへつなげている。初回の授業が10月6日であり、30日間チャレンジを実際に行いスピーチ作成時間の確保を考慮し、TEDトークの発展型アクティビティとしての逐次通訳演習は、初回授業から1ヶ月強の時間をおいた第6回目授業の11月17日に実施した。受講生には初回授業、またそれ以降の授業でも、今後のスケジュールと併せて30日間チャレンジ実践とスピーチ作成準備のリマインダーを適宜行うようにした。

アクティブラーニング発表のグループワークは、24人を6人ずつの4グループに分け、スピーカー、通訳者、オーディエンスの3つの役割を体験するロールプレイを実施した。教室の四隅に分かれて、各4グループが6人のグループメンバーの中で、スピーカーとしては自分の用意した30日間チャレンジのスピーチを行い、通訳者としてはパートナーのスピーチを日本語から英語に逐次通訳し、オーディエンスの役割の時は、スピーカー及び通訳者の評価を行い、グループ内でフィードバックを互いに行う時間をとった。

このアクティビティの狙いは、(1) 教材のプレゼンテーション内容を実践することで楽しみながら理解を深めること、(2) クラス全員の前でいきなり通訳をするのではなく、小グループに分けることでハードルを下げ通訳の実践演習を行うこと、(3) 事前準備の重要性について気付きを得ること、(4) お互いから学び合い客観的視点を持つことである。グループ内で連絡先を交換し、ペアを決めておく指示を出し、事前準備に関しての情報共有は各ペアに任せるようにした。発表原稿を事前に共有して万全の準備をしてくれているペアもあれば、当日まで何の打ち合わせもしていないペアも見受けられた。このアクティビティについて受講生からのコメントとしては、「事前準備の重要性」「緊張感」「やりがい」「通訳することの難しさの実感」「アクティビティの楽しさ」等について多数寄せられた。具体的なコメントの一部を紹介する。

- ・クラス全員の前ではなくグループ内だったので緊張しすぎることなくできた。
- ・あらかじめパートナーの話す内容を知っていたので単語リストを準備するなどして本番も安心して臨めた。
- ・事前準備をしていたおかげですごく息のあった発表になって自信ができました。
- ・何度目かのペアワークだったこともあり、比較的スムーズにできたと思う。
- ・事前に用意していなくてかなりグダグダだった。準備の重要さが分かった。
- ・ちゃんと事前共有がなかったので、分からない単語に苦戦した。
- ・初めての通訳だった上に事前準備が不十分で情けない発表になってしまった。事前準備の大切さを学んだ。
- ・事前準備が足りず、あやふやな訳になってしまった。他の人が準備で何を行っていたのかを知るのには為になった。
- ・立ってのプレゼン方式で、長い内容を訳したのでやりがいがあった。
- ・自分が実践したことは説得力をもって話せる。
- ・実際にやってみることにわくわくした。
- ・実践的な通訳は初めてで面白かったです。
- ・緊張したがやりがいもあり楽しかった。
- ・かなり長い通訳を行うことになりかなり難しかった。
- ・チャレンジの内容が人それぞれで面白かった。
- ・何より楽しい印象。通訳は緊張と不安でどうにかかなりそうだけれどそのスリルが楽しいのかもしれない。

事前準備をしっかりして臨み自信につながったコメントもあれば、一方で事前準備が不十分だったためにうまくいかなかったと言及するコメントも多くあり、いずれにしても、事前準備の重要性を認識する機会を持たせる狙いは果たせたと言える。実際に受講生が行った 30 日間チャレンジ内容は、主に「語学」・「節約」・「料理」・「筋トレ」関連と「その他ユニークなチャレンジ」にカテゴリー分けできるようなものであった。語学関連では、「ポルトガル語のツイッターを毎日フォローして和訳してみる」、節約関連では、「毎日水筒を持参して自動販売機を使わないようにした」、その他、「俳句を毎日詠んでみる」、「毎日人の良いところを褒めてみる」等々、様々なチャレンジがみられた。さらに、一日一日を振りかえる良い機会になった、今でもテーマを変えて 30 日間チャレンジを続けている、といった声も複数あった。

d) 学期末課題

学期末の課題はディスカッション通訳演習 (西畑 2016) を行った。12人ずつの2グループに分かれ、ディスカッショントピックを各グループで決め、グループ内で賛成派と反対派に分かれてのディスカッションをスピーカーと通訳者がペアになって行い、もう1つのグループがオーディエンスとして評価を行うロールプレイである。中間に行ったTED教材の発展型アクティビティで事前準備の重要性を認識したことが学期末の課題の取り組みにも活かされていた。

2.3 スマートフォンを活用したシャドーイング練習

a) 授業内でのシャドーイング練習手順説明と実践

授業内ではシャドーイング練習にスマートフォンを活用した。教材のプレゼンテーションのテキストを配布し、前方モニターで動画を再生し、クラス全体でプレゼンテーション教材のサマライジングを行った後で、シャドーイング練習の仕方についての説明、実践を行った。シャドーイングについては、少なくともその名称は受講生全員が聞いたことがあり、やったことがある受講生も多くいるものの、やり方は一つではないため、シャドーイング練習方法の一例として、改めて授業内でシャドーイングの練習手順についての説明を行った。シャドーイングの練習方法は様々な学習参考書でも紹介されているが、主に玉井 (2008)、鳥飼他 (2003) を参照しつつ、クラスのレベルにも合うように調整を加えながら手順の説明を行った。まずは (1) テキストを見ずにリスニングを行い、(2) テキストで用語の確認、(3) テキストを見ながら音声に合わせて音読するシンクロ・リーディング、(4) テキストを見ずに音声にフォーカスしたプロソディ・シャドイング、最終的には (5) 音声と意味両方に意識を向けたコンテンツ・シャドーイング、とクラス全体で段階的に実践練習を行った。

b) スマートフォンへの音声教材ダウンロード

クラス全体でシャドーイング練習をした後に、スマートフォンに音声教材をダウンロードする手順を、前方モニターにパワーポイントで画像を表示させながら口頭で説明を行った。TED トークのホームページ画面より、ダウンロードボタンをクリックし、音声のダウンロードを行う手順を説明し、授業内で実際に受講生が自分のスマートフォンにダウンロードを行う時間をとった。質問がある場合は授業内でするように促し、全員がダウンロードのやり方を理解し、実際にスマートフォンに保存できる時間を設けた。ダウンロードするように指示した意図としては、一度ダウンロードしておくこと、インターネットの接続環境に左右されずにいつでも通学中や隙間時間にリスニングやシャドーイングの練習ができ、その都度ネット上で検索してサイトを開くような手間を省き、すぐに練習に使えるようにしておくことである。授業中に一斉にダウンロードを行う時間をとることで、授業終了後、教室を出てから即座に練習可能な状況を作ることができるようにした。



図 2 ダウンロード手順説明時の画像

授業で行ったシャドーイングの練習手順及びダウンロードした音声をもとに、自習としてシャドーイング練習を行ってくる指示を出した。また移動中や通学電車の中で、声を出しての練習ができないようなところでは、声を出さずに頭の中だけでシャドーイングを行うサイレント・シャドーイング、もしくは小声で行うマンブリング練習を取り入れることを推奨した。次の授業には、スマートフォン、イヤホン、配布したテキストを持参するように指示を出した。

c) シャドーイングペアワーク手順

翌週の授業で、まずはウォームアップとして、自分でスマートフォンにイヤホンを挿してシャドーイングを行い、その次にシャドーイングのペアワークを行った。準備するものはスマートフォン、イヤホン、テキスト、筆記具で、手順としては、(1) ペアを作る、(2) テキストを交換する、(3) 順番を決めて、スマートフォンにイヤホンを挿し、ダウンロードした音声を再生し、シャドーイングを行う、(4) パートナーのシャドーイングを聞いてできていないところをパートナーのテキストにチェックを入れる、(5) 終わってからパートナーにフィードバック・アドバイスをする、(6) 役割を交代する、のように進めた。

この日の自習課題は、パートナーからのフィードバック・アドバイスをもとにシャドーイング練習を行うこととし、翌週はペアを変えてのシャドーイングペアワークを再度授業内で行った。

3. CALL 教室との比較

語学学習によく利用されている CALL 教室については多くの大学が導入しており、神田(2006)でも様々なレイアウトや設計上の課題等が紹介されている。CALL 教室の使用にあたってはメリット・デメリットがあり、通常教室でスマートフォンを活用することで、どれだけ CALL 教室のメリットを実現できるか、またデメリットを補うことができるかの視点から見ていきたい。下記の表 2、3 では、CALL 教室で通訳クラスを実施したメリット・デメリットについての田中(2006)のアンケート調査結果を左記に表示し、今回の通常クラスでスマートフォンを活用する事でメリットを実現できたかどうか、デメリットを補う事ができたかどうかを右に併記した。

表 2 CALL 機利用メリットとの比較

CALL 機利用のメリットは何だと思うか？ (複数回答)		対象クラスでのスマートフォン活用
繰り返し音声教材を聞ける点	75%	◎(実現できる)
録音のやり直しが容易な点	65%	△(実施せず)
スピードの調整ができる点	35%	△(実施せず)
音声波形を見ることができる点	25%	△(実施せず)
メリットは無い	0%	
その他(分からない)	10%	

メリットとして挙げられている 1 つ目の繰り返し音声教材を聞ける点は、スマートフォンでも実現が可能であった。2 つ目、3 つ目及び 4 つ目の録音のやり直しが容易な点、スピードの調整

ができる点、音声波形については、スマートフォンの機能活用の仕方によっては実現可能性があるものの、今回の授業では活用対象範囲には入れていなかった。

次に、CALL 教室のデメリットについては次のような結果となっており、メリットと同様、今回の対象クラスのスマートフォンの活用でどこまで補うことができたかを併記している。

表 3 CALL 機デメリットとの比較

CALL 機利用のデメリットは何だと思うか？(複数回答)		対象クラスでのスマートフォン活用
個人学習になってしまう	20%	◎(デメリットを補う事ができる)
練習が単調になってしまう	10%	◎(デメリットを補う事ができる)
機械操作が難しい	5%	◎(デメリットを補う事ができる)
デメリットはない	60%	
その他(分からない)	10%	

一つ目の個人学習になってしまう点については、スマートフォンを使えば先に紹介したようなペアワークも簡単に実践でき、イヤホンを使って集中できる状況は確保しつつも、お互いから学び合うことができ、個人学習になってしまうデメリットを補うことができると言える。二つ目の練習が単調になってしまう点については、後に紹介する受講生対象のアンケート調査結果からも明らかになっているが、スマートフォンを活用したシャドーイングペアワークでは適度な緊張感を持って行うことができ、このデメリットも補うことができると言える。三つ目の機械操作が難しい点については、今回のスマートフォンを用いたクラスでは、ダウンロードの手順を授業内で説明し、実際にダウンロードをする時間を確保し、また実際の操作も再生と停止のシンプルな機能しか使用しておらず、操作が難しいといった声は全くあがらなかった。また講師側の視点にまで広げて考えてみると、CALL 教室の機材操作に対して講師が複雑である、難しいと感じる場合も少なからずあると考えられるが、スマートフォンの操作に関しては、その難しさといった点でもデメリットを補うことができると考えられる。機能活用範囲を拡大するような場合は、また検討が必要になると思われるので、その点は今後の課題で触れていきたい。

以上をふまえて、スマートフォン活用により、CALL 教室のメリットの一部を実現できるだけではなくデメリットも補うことができ、また通常教室では机の配置変えや受講生が座席を移動してペアワークやグループワークを行うことも容易にでき、活用メリットは大きいと言える。

4. 受講生のスマートフォン活用に対する受け止め方

最終授業において受講生対象にアンケートを実施し、受講生のスマートフォン活用に対する受け止め方を調査した。

4.1 授業内でのスマートフォン活用

スマートフォンを授業内で使うことは良かったと思うか？の問いに対し、「どちらとも言えない」の1人以外、全員から「はい」の回答が得られた。

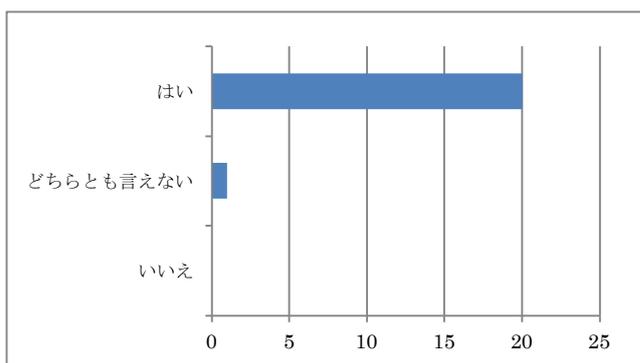


図 3 Q: スマートフォンを授業内で使うことは良かったと思うか

良かったと回答した受講生のコメントとしては、「便利」「みんな持っている」「集中できる」「自分のペースでできる」「勉強しやすい」などのキーワードが多く見られた。具体的には下記のようなコメントであった。

- ・便利なものは使った方がいいと思うので良かったと思う。
- ・皆持っているので、1つのTVを通して見るより良かったと思う。
- ・みんな持っているし、便利だった。
- ・別に遊んでいるわけではないからいいと思う。
- ・スマートフォンは持ち運びができるし、イヤホンを挿すことによって集中できるのも良かった。
- ・音声聞きやすくて良かった。
- ・各自集中して聞けたのが良かったです。
- ・スピーカーと違い、座席の位置に関わらず確実に聞き取れて良かったです。
- ・全体でオーディオを使って流すのに比べ、自分たちのペースで色々考えながらできたので良かったと思う。
- ・個人のペースで作業を進められた。
- ・スマートフォンを使った授業はとても勉強がしやすかった。
- ・そのまま通学や家でもスマートフォンを使って勉強しやすい。

「どちらとも言えない」の回答であった1人についても、今回のTED教材をダウンロードして自習できるようにして良かったかどうかについては、「はい、TEDの英語は表現そのものもその後生かすのが好きです」との回答であった。受講生のフィードバックからも、全体的に授業での活用に肯定的な反応であり、否定的なコメントはなかった。あえて言うなら、電池の残量が少なくなるとやや心配だったというコメントが1人からあがった。これは、CALL教室ではでることのない類の懸念だと言えるが、長時間スマートフォンを連続して使用するアクティビティは行っておらず、また授業内でスマートフォンを使う場合は、事前にその旨を伝えておくことで対応できるのではないかと考えられる。

4.2 授業内でのスマートフォンを使ったペアワーク

授業内でスマートフォンを使ったシャドーイングのペアワークを行った事に対しては、「互いに学び合うこと」「緊張感」「自分自身の進歩」「シャドーイングの難しさ」に関するコメントが多く見られた。具体的なコメントの一部は以下の通りである。

- ・シャドーイングは個人でやることが多く自己完結しやすい作業だと思うが、ペアでやることによって自分がどこでつまっているのか、どこに気をつけるべきなのか、新たなことが色々学べた。
- ・ペアに聞いてもらうことで見えてきた改善点も多かった。
- ・聞き取れていないところが細かく洗い出せた。
- ・できてないところを互いに確認できて良かった。
- ・緊張感があった。
- ・ペアの人に聞かれてしまうので、あまりにひどいと恥ずかしいので家で練習するモチベーションがでた。
- ・適度な緊張感が良かった。
- ・2回目は少し上達していて嬉しかった。
- ・家で練習したことがそのまま生かせるので楽しかった。
- ・最初の方は、自分の声と音声が混じってしまい、何を言っているのか分からなくなって止まってしまうことがよくあったが、慣れてくると、自分の声を聞かずに音声だけに集中して声を出せるようになった。
- ・あまり難しい単語もなく、速度も速くないが、シャドーイングをする事が最初難しく、同時に 2つのことを成すにはトレーニングが大事なのだと思った。
- ・不定詞など細かい単語を落としてしまうこと、一度つまと立て直しが難しいことを学んだ。
- ・数字につまるとそこから先が全然読めなくなってしまった。

4.3 スマートフォンにダウンロードしての自習

スマートフォンにダウンロードして自習できるようにして良かったと思うか、の問いに対しては、全員から良かったとの回答が得られた。

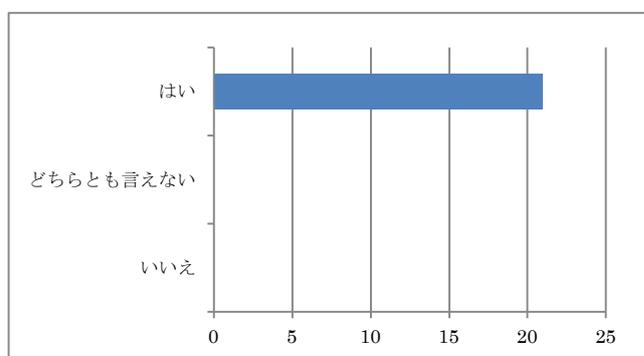


図 4 Q: スマートフォンにダウンロードして自習できるようにして良かったと思うか

スマートフォン活用に関して、「いつでもどこでも」「繰り返し聞ける」「英語に触れるきっかけ」「教材の適切性」についてのコメントが多く見られた。具体的なコメントは以下の通りである。

- ・スマートフォンにダウンロードしてきくのはとても新鮮でしたが、行き帰りに聞けて効率的でした。
- ・ダウンロードすることで、バイト帰りの電車の中や帰省中に聞く事ができた。他の分野の知識を深める事にもつながっている。
- ・Wi-Fi がないところでもどこでもきけた。
- ・通訳において大切な音声というのを一人一人が教材として持てたのが良かったと思う。CDではなくスマートフォンなのでいつでもきけた。
- ・ちょっとした隙間時間にリスニングできたのが役立った。
- ・同じものを聞き続けることでだんだん聞き取れるようになり自信がつく。
- ・習慣として毎日聴いていたので段々すべてがきこえるようになった変化が感じられた。
- ・同じものを徹底的に練習できたので良かった。
- ・自分のペースで聞き直すこともできたので役立った。
- ・リスニングの練習になった。
- ・英語を聞くきっかけになった。
- ・英語のリスニング、発音の練習になった。
- ・様々な方法で練習することが役立ったと思います。
- ・表現が参考になる。
- ・内容的にも難易度的にもぴったりの教材だと思う。
- ・内容が好き。
- ・短いのも良かったと思う。

4.4 授業の難易度・満足度

対象クラスの受講にあたってはレベル分けを行っておらず、TOEIC のスコア分布では 500 点台から 900 点台とばらつきがあるクラスではあったが、授業の難易度・満足度についてもアンケート調査を行った。

a) 授業難易度

難易度調整にあたっては、アイスブレイカーによる話しやすい良い雰囲気作り、ペアワーク・グループワークの活用、受講生の声や反応をよく見聞きし使用教材・レッスンプランを適宜柔軟に微調整すること、アクティビティの実施にあたっては段階を踏んだアプローチを取ること等に留意して授業を進めるようにしており、「難し過ぎ」にも「易しすぎ」にも偏ることなく、「ちょうど良かった」、もしくは「やや難しかったがやりがいがあった」の反応が得られることをレベル設定の目標としている。この授業の難易度はどうであったかの問いに関して、[高すぎる・やや高い・ちょうど良い・やや易しい・易しすぎる]の 5 段階では、図 5 に示すように、「やや易しい」が 1

人、「やや高い」が3人、それ以外の全員が「ちょうど良い」の回答であった。「やや易しい」と回答した1人はTOEIC700点台、「やや高い」と回答した3人の内訳は、TOEIC500点台、600点台、800点台であり、その他全員が「ちょうど良い」と回答していることから、難易度調整はうまくいったと考えられる。授業への取り組み姿勢に関しての受講生のコメントとして、「正直英語を話すことにコンプレックスを感じていますし、他のクラスメートのレベルが高く感じられたので、課題に対する姿勢だけは負けないよう一生懸命取り組んでいました」(TOEIC500点台学生)、「毎週来るのが楽しい授業ってなかなかないので、沢山積極的に関わって、失敗も恐れず挑戦することができた」(TOEIC800点台学生)にあるように、数値的なTOEICスコアに関係なく、受講生本人の授業に対する取り組み姿勢が、素晴らしいパフォーマンスや他のクラスメートへの良い影響、授業への大きな貢献、学期を通して大きな成長につながっている事例がみられた。受講生のコメントでは楽しかったという声が多く寄せられ、各自が楽しみながら様々な気づきを得てペアワークやグループワークに取り組めたことも難易度調整がうまくいった理由であると考えられる。

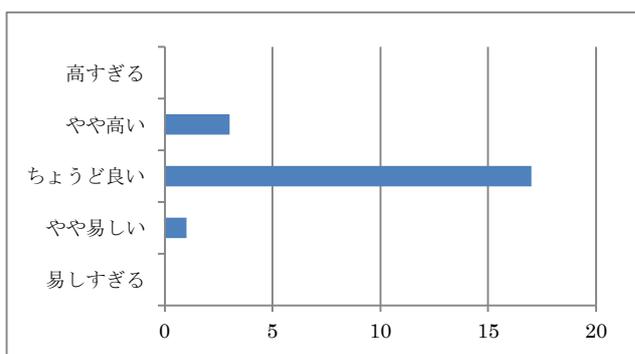


図5 Q: 授業の難易度はどうだったか

b) 授業満足度

満足度調査として、受講して良かったか、今後もこのような授業を受講したいかの2つの質問を行い、結果は下記の通りであった。今回この授業を受講して良かったと思うかについては全員から「強く思う」もしくは「思う」の回答が得られた。

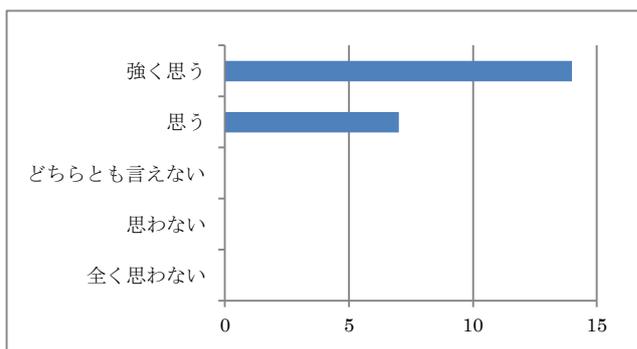


図 6 Q: この授業を受講して良かったと思うか

上記に加えて、今後もこのような授業を受講したいかについては、下記図 7 に示すように、1 人のみ「いいえ」の回答、それ以外の全員は「はい」の回答であった。「いいえ」の回答をしていた受講生は、「通訳にはならないのでもっと自分の意見を表明する練習をやってみよう」とのコメントであった。

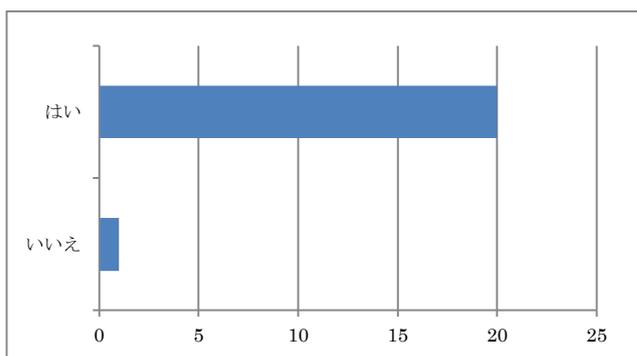


図 7 Q: 今後もこのような授業を受講したいか

5. 結果及び今後の課題

逐次通訳クラスで、通常教室でのアクティビティ及び自習用ツールとしてスマートフォンを活用した結果として以下の 2 点を挙げる。

- 通常教室のペアワークやグループワークの実施がしやすいメリットは維持しつつ、CALL 教室のメリットの一部を実現することができ、またデメリットも補うことができることに加えて、自習用のツールとしても活用できる効果がみられた。
- 授業内で活用についても、自習用のツールとしても、受講生がスマートフォンの活用を有効であると捉えていることが分かった。

今後の課題としては、一つ目には教材の選定が挙げられる。非常に豊富なプレゼンテーションが収録されている TED トークであるが、TED トークにしても、他のリソースを使用するにして

も、受講生のレベルや授業の目的に合う教材を選定することは引き続き大きな課題となる。二つ目に、スマートフォンの機能活用範囲、必要性の検討があげられる。今回はダウンロードした音声の再生と停止のシンプルな機能のみを活用しているが、次は録音機能についての導入を検討していきたいと考えている。ただ音声波形などに関しては、そもそも音声波形まで活用範囲を広げる必要があるかどうかの判断に加え、必要があると判断した場合の実現可能性について、今後も検討が必要となる。三つ目の課題としては、今回は逐次通訳演習クラスにおけるスマートフォン導入の事例であったが、同時通訳クラスで導入する時の活用方法についても検討していきたい。

その他考えられる懸念点として、スマートフォンを持っていない受講生が複数いるクラスの場合、どこまでスマートフォンを活用するかの点がある。初回授業でスマートフォンを持っているかどうかの質問をした際に、対象クラスは全員が保有している状況であったが、スマートフォンを持っていない受講生がいても、その数のごく少数である場合は、今回のようなペアワークを行う際に 2 人に 1 台あればペアワークは可能となる。しかしながら、総務省 (2016) が発表しているスマートフォンの普及率は、「情報通信機器の普及が全体的に飽和状況の中、スマートフォン保有が年々増加し 7 割を超える」と言及がある通り、世帯保有率で 2015 年末時点でも 72.8%とされており、これまでの傾向からも、普及率が今後上がっても下がることは考えにくい。この点については今後大きな懸念点にはならないと考える。

以上、スマートフォンを逐次通訳演習クラスに導入する初めての試みを行い、CALL 教室との比較からその効果、またスマートフォン活用に対する受講生の受け止め方を調査した。かつては LL (Language Laboratory) 教室が語学学習に使われていたのが CALL 教室に取って代わられたが、CALL 教室の導入がさかんに行われてから既に 10 年以上が経過している。スマートフォンの普及には目をみはるものがあり、最新技術の利便性を活用しながら、その時々状況に合った教授法も今後求められると考えられる。稲生他 (2010) でも通訳教育においての現場の教員からの発信の必要性について触れられているが、学会のような場で今回の試みのような実践報告を発信していくこと等と併せて、今後も受講生の視点を忘れることなく今後の課題についても検討していきたい。

.....

【謝辞】

本稿は、第 18 回日本通訳翻訳学会の年次大会での口頭発表に加筆修正を加えたものである。貴重なフィードバックをくださった皆様と私の受講生に感謝の意を表したい。

【著者紹介】

西畑香里 (NISHIHATA Kaori) 通訳者、東京外国語大学非常勤講師。

ハワイ大学大学院修士課程修了。東京外国語大学大学院博士前期課程修了。

【註】

1. TED “Try Something New for 30 days”

[Online] https://www.ted.com/talks/matt_cutts_try_something_new_for_30_days (Sept. 8, 2017)

【参考文献】

稲生衣代・河原清志・溝口良子・中村幸子・西村友美・関口智子・新崎隆子・田中深雪(2010)

「日本における通訳教育の課題と展望 日本通訳翻訳学会・通訳教育分科会 2009-2010 年度プロジェクトより」『通訳翻訳研究』第 10 号: 259-278. 日本通訳翻訳学会

神田明延 (2006) 『CALL 導入と運用』 国際語学社

田中深雪 (2006) 「マルチメディア時代の通訳訓練—CALL システムの導入とその有効活用について—」『通訳研究』第 6 号: 183-195. 日本通訳学会

田中深雪・稲生衣代・河原清志・新崎隆子・中村幸子 (2007) 「通訳クラス受講生たちの意識調査—2007 年度実施・通訳教育分科会アンケートより」『通訳研究』第 7 号: 253-263. 日本通訳学会

玉井健 (2008) 『決定版英語シャドーイング超入門』 コスモピア

鳥飼玖美子・玉井健・染谷泰正・田中深雪・鶴田知佳子・西村友美 (2003) 『はじめてのシャドーイング』 学習研究社

西畑香里 (2016) 「コミュニケーション能力向上を目標とした学部生対象の逐次通訳演習実践報告」『日本通訳翻訳学会』第 17 回年次大会予稿集 p.24

総務省ホームページ「主な情報通信機器の普及状況(世帯)」[Online]

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/html/nc252110.html> (Sept. 8, 2017)